

異文化間能力を育むための翻訳活用法

—初級・中級の日本語クラスでの実践—

行 木 瑛 子*

1. はじめに

第二言語としての日本語教育では、長い間翻訳が活動の1つとして使用されてきた。ただ、語学クラスにおける翻訳は、語彙や文法習得が中心で、文脈がないとの指摘もある(Cook, 2010)。本研究では、選択体系機能言語学に基づき、翻訳を「活動領域(Field)(内容)、役割関係(Tenor)(書き手と読み手の社会的役割・関係)、伝達様式(Mode)(話し言葉/書き言葉の違い等)(Halliday & Matthiessen, 2004)を考慮した1つの言語から別の言語への意味の移転、または意味のデザイン」と定義した上で、初級・中級の日本語学習者の異文化間能力の向上に主眼を置いた新たな翻訳活用法を探る。

2. 先行研究

言語教育においては翻訳がクラス活動の一環として現在も頻繁に取り入れられているが、応用言語学の議論上では翻訳が常に評価されていたわけではない。1940年ごろまでは文法学習と古典文学等の翻訳を通して言語を学ぶ文法訳読法が盛んに行われていたが、20世紀前半頃から、言語教育(特に英語教育)において学習者の第一言語の使用があまり奨励されなくなり、2つ以上の言語が関係する翻訳については俎上にすらあまり載せられなくなっていた(Cook, 2010)。Cook(2010)は、この前提には、言語習得においては第一言語習得

を模倣したモノリンガルな環境が最も効果的で、目標はネイティブスピーカーのようになることという考えがあると述べている。しかし、1990年頃から応用言語学の分野でモノリンガリズムやネイティブスピーカー規範への批判が起こり(Firth & Wagner, 2007)、学習者は目標言語のネイティブスピーカーになるために勉強するのではなく、文化間の「third place(第三の場所)」を探ることを推奨されるようにもなった(Kramersch, 1993)。この流れから、語学クラス内で目標言語を重視し、第一言語を排除することに疑問が呈され、第一言語の役割が見直されるようになった。この中で、翻訳が言語教育における第一言語の有効な活用法として再評価されるようになった(e.g. Cook, 2010)。

また、グローバル化が進む昨今は、言語的・文化的な仲介者・媒介者として学習者の異文化間能力をどう伸ばしていくのかが盛んに議論されている。「異文化間能力」については様々な定義やモデルが提示されているが、Byram(1997)は、その異文化間コミュニケーション能力モデルにおいて、まず、「異文化間能力」と「異文化間コミュニケーション能力」を、前者を母語(their own language)で他文化の人々とコミュニケーションする能力、後者を外国語で他文化の人々とコミュニケーションする能力と区別・定義した上で、異文化間の対話にかかわる話者を「異文化間話者」と定義している。その上で、コミュニケーションの成否は、効果的な情報交換だけではなく、人間関係をいかに構築・維持していけるか、生じる齟

*ロンドン大学 SOAS 大学院生

齟齬を調整・仲介していけるかという点からも評価すべきだと述べ、異文化間能力として「態度 (attitude)」、「知識 (knowledge)」、「解釈と関連付けのスキル (skills of interpreting and relating)」、「発見とインタラクションのスキル (skills of discovery and interaction)」、「批判的的文化アウェアネス (critical cultural awareness)」の5要素を挙げている。まず、「態度」については好奇心、オープンな態度や、自身・他者の信念について即断せず、他者の視点で分析すること、「知識」については、自身・他者が属する社会グループや、社会的・個人的なインタラクション・プロセスについての知識が必要だと述べる。また、「態度」や「知識」は異文化コミュニケーションのプロセスの中で変化していくものであり、このプロセスには、自文化・他文化のデータやその潜在的関わりを分析する「解釈と関連付けのスキル」、コミュニケーションや文書等を収集する中で文化についての新しい知識を獲得し、それを実際のコミュニケーションの場で使用できるかという「発見とインタラクションのスキル」、さらには自文化と他文化の見方等を明示的な基準に基づいて批判的に評価する「批判的的文化アウェアネス」が関わると述べる。Schulte(1988)は、翻訳プロセスは、常に1つの文化から別の文化へと関連付けていく作業をしながら、起点言語でも目標言語でもない第3の場所を探す活動であって、翻訳は言語間だけでなく文化間のエキスパートを育成する場も提供できると述べる (ibid:175)。これはまさに異文化間能力に関係する活動であり、翻訳を通して異文化間能力を育む場を提供できるのではないかと思われる。

さらに、言語教育では初級・中級と上級のコースの間の隔たりが指摘されている。Kern(2002)は、初級・中級では日常的コミュニケーションに主眼を置いた暗記や文型の練習に焦点が当てられることが多い一方、上級では批判的ディスカッションや口頭発表などを通じた分析的・総合的な

力の育成等に重きが置かれることが多いと述べ、このギャップを埋める必要を指摘している。翻訳はこのギャップを埋めることができる活動なのではと考える。例えば、「Sachiko」という一語をとっても、「サチコ」、「さちこちゃん」、「幸子様」等、読み手、書き手の立場、翻訳の様式や目的により、様々な翻訳の可能性がある、どの状況でどの翻訳を選ぶのか等、初級・中級の段階から考えさせることで、洗練された言語使用につながると考えられる。

3. データについて

本研究の参加者はロンドン大学 SOAS で日本語を専攻する初級・中級学習者各 11 名である。選択体系機能言語学に基づき、テキストの内容、書き手と読み手の社会的役割・関係、伝達様式 (話し言葉/書き言葉の違い等) を意識させ、その中で自分がどう行動するかを考えさせることで上記の異文化間能力の育成につながるのではないかという仮説を立て、研究を行った。研究では翻訳授業を週 1 回 90 分、各 4 回ずつ行った上で、翻訳プロセスの変化をクラス前後のインタビュー、think-aloud protocol という手法を使った短い文章の翻訳、クラス内のディスカッションや翻訳の宿題・翻訳自己分析シート、学習日記を通して分析した。授業のトピックは、異文化間で齟齬や問題が起こり得るようなものや日本文化と呼ばれるものの多様性に注目させるもので、かつ、初級・中級学習者が既存の知識を使ってディスカッションできるものを選ぶようにした。翻訳課題テキストは、Reiss(1981)による「情報型」(新聞・ニュース等)、「表現型」(小説等)、「効力型」(広告等)という3つのテキスト分類を含めるようにし、できるだけ実際のウェブサイト等で見つけたものを使用するようにした。翻訳タスクを設定するにあたっては、「大学の日本サークルのイベントのお知らせの翻訳を頼まれた」等、初級・中級

学習者が実際に直面しうるものを選んだ。また、実生活では英訳だけでなく和訳の必要性も十分にあり得ること、また、教育的効果も高いと考え、英訳・和訳のどちらも取り入れた。実際に翻訳させる際は、読み手、伝達様式、テキストの目的等にも注意を向けさせ、これが他者のいる異文化コミュニケーションの場であることを必ず意識させるようにした。また、文化の提示方法については、Kubota (2003:75) の文化の4つの批判的アプローチに基づき、具体的な文脈を設定して記述的に文化を提示した他、複数のテキストを翻訳前などに提示し、文化内の多様性や流動的で変化する性質にも注目してもらうようにした。

4. クラスの結果

今回は紙面の都合上、中級の第1回目のクラスとその分析結果のみを紹介する。翻訳タスクは、英訳課題で「AKB48の大島優子のブログを翻訳して、自分のブログに載せる」というものにした。日本語の歌やブログを翻訳している学生が現に何人かいることから、上記のようなタスクにした。この目的は、特に「丁寧体」と「普通体」に注目しながら、読み手と書き手の関係等を踏まえた上で、翻訳する際に異文化間で起こりうる問題を予測し、文化・言語間の仲介者としてどのような翻訳をするのか考えてもらうことであった。

クラスの手順・様子は以下のとおりであった。

① ウォーミングアップ

まず、いつ「丁寧体」「普通体」を使うのかを学生に聞いた。「先生とは『丁寧体』、友達とは『普通体』」「論文は『普通体』」等の意見が出た。その後、クラス前に宿題として「辻希美(タレント)」、「野田佳彦(政治家)」、「加藤茶(タレント)」、「大島優子(タレント)」、「ベッキー・クルーエル(タレント)」の5人について情報を集めてくるように促していたので、このうち辻希美、野田佳彦、

加藤茶について調べた情報を発表してもらった。事前に宿題を出した目的は、こちらから情報を提供してステレオタイプを植え付けるのを避けるためであった。その後、名前を伏せたこの3人のブログを見せ、誰が書いたかを当ててもらった。どうしてそう思ったのかを発表してもらったところ、「絵文字をたくさん使っているから女の子の人だと思った」や「つまらないからきっと総理だと思った」などという答えが出た。また、日本語にも注目してもらい、「丁寧体」「普通体」で書くことでどういう印象を受けるかなどを話し合った。

② 課題の提示・翻訳

次にAKB48や大島優子について調べてきたことを発表してもらった上で、課題文を読み、全員で語彙や絵文字の意味等を確認した。以下のとおりこの課題文は、最初は「丁寧体」だが、途中から「普通体」になっているものであった。

私も明日、出演させていただくこととなりました
(´▽`)ノ(中略)こんな私のテレフォンショッキング、ぜひ覗いてね～

クラスでは、まず、①なぜ「出演します」ではなく「出演させていただきます」と言っているのか、②なぜ「丁寧体」から「普通体」に変わったのか、③大島優子はどんな個性を出したいのかについて話し合った。①については、ファンやディレクターに感謝の気持ちを表したいのではないかと、②については、ただ丁寧だけでなく、フレンドリーな様子を「丁寧体」と「普通体」の使い分けを通して表現したいのではないかと、③についてはcheeky(生意気)やditzy(ちょっと馬鹿な)、お茶目なイメージを出したいのではないかと、それと同時にファンへの感謝を忘れないようにしているのではないかなどの意見が出た。次に原文の目的、読み手、様式と、自分の翻訳の目的、読み手、様式について考え、これらを意識した上で翻訳を試みた。クラスでは上記の2文のみを各自翻訳し、ペアで比較した後で、3グループに発表して

もらった。

③ 宿題

宿題は和訳にし、イギリスのマン島出身で、日本でも活躍している歌手のベッキー・クルーエルの英語のブログを訳してほしいと日本の友達に言われたという設定にした。宿題については、2回目のクラスの最初にフィードバックをし、辻希美などの他のブログを参照しながら、「cuteなイメージ」や「friendlyなイメージ」を出すにはどのような言葉を使えばいいかなどを考えた。

5. 分析

次に、上記のByramの異文化間能力の5つの基準に照らし合わせながら、クラスのディスカッション、学習日記、翻訳の宿題・翻訳自己分析シートを分析する。なお、異文化間能力は究極的には、個人々が他文化を学び、関係する言語・文化の間で一時的に主観的な第三の場所を見つけようとする試みで、一生、少なくとも長期間に渡って育まれるプロセスであるため(Witte, 2011)、このクラスだけで異文化間能力が育まれたということは言えないが、少なくとも翻訳を通して異文化間能力のどの側面を伸ばせる可能性があるのかが、ある程度分かるのではないかと考える。

① 態度

態度については、「これから日本人のブログを読んで、翻訳するようにしています」(Lisa)等、ブログについての好奇心が芽生えていることが学習日記から見受けられた。ただ、自文化・他文化の事象に対する他者の視点を考えようとする姿勢や、自身の価値観等を疑問視する姿勢、自身・他者の信念等について即断しない姿勢については、ほぼ観察されず、学習日記も「興味がある」レベルで終わっているものがほとんどであった。ただ、こういった態度について翻訳のクラスで扱えない

ということは必ずしもない。例えば、学習日記で「実は、このパイロットスターディの前に、ベッキーを知っていて、少しうるさい人だと思いましたが、宿題は良い練習でした！」(Julia)のように書いている人や、「日本語学科の人はベッキーの音楽があまり好きじゃない」(Lucy)とクラス外で言っていた学生もいて、例えば、「どうして少しうるさい人だと思ったのか」など、ディスカッションをし、自身の信念等を振り返らせてみる機会は十分にあったのではないかと考えられる。

② 知識

特に今回のクラスの場合は、同じ社会グループの中でも書き方に違いがあることに気付き、知識が広がったという人が多くいた。

「ブログについていろいろなスタイルがあるのは知りませんでした。」(Lisa)

「3人の有名で全然違う人のブログでした。仕事も全然違うので、お互いのブログを比べるのも面白かったです。例えば、首相の野田佳彦のブログと比べると、AKB47の歌手の辻希美のブログはどう違うのを見るのは、一番面白かったことだと思います。やはり書き方は全然違います！」(Hassan)

「クラスで、どんな人を分かるために、そのブログの言葉を見ました。わたしは前にそのことを考えませんでしたから、面白くて、良いクラスだと思いました。」(Julia)

さらに、その日本語の異なるスタイルを英語でどう表現するかをディスカッションできたことで、自身のインタラクションの方法についても振り返る機会を与えることができた。例えばクラス内で「丁寧体」と「普通体」の変化を翻訳したとき、当初は「英語ではそういう違いはないから無理」という学生も多かったが、話し合いの中で「tune in」や「You should definitely check out」など、単語の選択を変えることなどである程度カジュアルさを表現できるのではというふうに振り返ることができた。

③ 解釈と関連付けのスキル

他文化の文書や事象を解釈し、自文化のものと同様に関連付けるとするのは翻訳活動そのものであり、様々な場面でこのスキルに関連する記述や発言がみられた。まず、上記のとおり、クラス内では、「丁寧体」「普通体」に注目しながら、他文化の書き手の意図を読み取り、自文化の読み手に伝えるために、つまり、文化間の仲介者として行動する機会を与えることができた。さらに、ペアでの比較やクラス全体でのディスカッションを通して自分の解釈について熟考する機会も与えられた。学習日記にもペアでの比較やディスカッションが明示的に役に立ったと述べている人がいた。

次に、宿題でも書き手の意図と読み手を意識しながら、問題点を予測して翻訳している様子が伺えた。例えば、Vlogを「ビデオブログ」と訳したLucyは、“The word ‘Vlog’ comes from the English ‘video blog’ and so I thought its meaning might be difficult to understand for Japanese people, who would be the target audience.”と読み手を明らかに意識した翻訳をしていた。また、「ベッキは若くて、いつもPoliteだと思って、だいたい全部ていねいな日本語で翻訳しましたが、英語にも短くなった文を友達言葉にしました。多分短いところには『わたしはかわいいですよ』という感じがでますから、Plain Formのほうがいいと思いました。でも、そのあとで『ビデオをぜひ見てください』のような頼みの感じがあるので、ていねいな日本語を使いました。」(Nidhi)等、書き手のスタイルに気を配っている学生も多数みられた。ただ、それが実際の翻訳に反映されているかというところではなく、「ベッキーのかわいいイメージのため」と翻訳自己分析シートに書いているHassanが「ヴィーログのチャンネルで全部見られる。その下は最新のURLだ!」というような、あまりかわいとは思えない翻訳をしているのも見受けられた。ただ、このように書き手と読み手の間に立って、書き手の意図を読み取り、

自分達の解釈の理由を明確にしながら、いかに1つの言語・文化を別の言語・別の文化と関連付けるかということを意識的に考える努力を多くの学生がしていたことは注目に値する。そして、2回目のクラスの冒頭で、翻訳自己分析シートと実際の翻訳にギャップがあると教師が感じた点を取り上げ、クラス全体で「どうすればcuteなイメージが出せるか」等を考えたことで、解釈・関連付けのスキルにつながる活動ができたのではないかと考えられる。

最後に、学習日記でも、文法や語彙以外のことに注目することの大切さを感じ、新しい解釈のスキルを学べたと思った学習者が多くいた。

“Not only was it interesting but I thought it was useful as it made us really think about the feeling of the text.

In my core lessons I usually only think about the meaning when I read a piece of text, but this lesson showed me that it can also be really important to consider the aim and tone of the text. Because of this I felt that this lesson taught me new skills in being able to look at the tone of the text and how the writer may want to be portrayed when considering and English translation.” (Charlotte)

“I had to think about stuff I wouldn't normally have to consider in class translations, like style, target audience etc. which really is an important area.”(Lucy)

さらに、翻訳の目的や読み手、様式を意識させることで、どの翻訳も許されるのだという印象を与えるのを避け、「この場面のこの書き手・読み手ならこう訳したほうがいい」「この目的ならこの翻訳がうまく表現できる」等、翻訳の際の明示的な基準も設定できたのではないと思われる。

④ 発見とインタラクションのスキル

今回、スタイルの違いについて気付いた学習者が多かったが、クラスという限られた状況の中での発見であるので、これがどこまで教室外でいかせるのかは未知数である。ただ、宿題で

はブログの和訳という、普通のクラスでは使わないものを扱ったが、“I found the homework awkward because I didn't know how to translate English-slang. For this, the class was helpful as some slang terms had already been covered and I could use them as frameworks.” (Mary) というように、未知のものを既知のものと結びつけて対処していこうとする姿勢が見受けられた。ただ、Juliaのように「若い女の人のブログので、もっと自然で、カジュアル日本語を使ってみました、まだ良くなりません。もっと練習が要ります。」と実際に使用するのには難しいと感じる学習者もいるようであった。

⑤ 批判的文化アウェアネス

批判的文化アウェアネスは今回のクラスでは特に見受けられなかった。ただ、例えば、今回の翻訳課題はかなり女性のイメージを前面に押し出したブログであったため、こういった言語使用についてどう思うのか、自分がブログを日本語で書く場合にこういう言語使用をしたいのか等、教師側の工夫1つでもっと話し合いを広げるチャンスはあったのではないと思われる。

6. これからの課題とまとめ

上記のとおり、翻訳を通して、特に解釈と関連付けのスキルをはじめとした異文化間能力に関係する、考えさせるタスクを中級学習者に提示し、中級学習者も書き手と読み手を意識しながら、十分に言語間・文化間の仲介者として行動できる可能性があることを示せたのではないと思われる。

ただ、これからの課題として5点が挙げられる。まず、批判的文化アウェアネスに関する活動が少なかったことである。機会は十分にあったので教師側のディスカッションの運び方などを考える必要がある。次に、既存のクラスとの調整があげられる。特に今回扱ったブログは、既存の教科

書でもあまり取り上げられない題材であり、既存のカリキュラムとの整合性が取りづらい。“It felt more relevant to both life and a job.”(Lucy)等、この翻訳のクラスに肯定的な意見を述べた学生は多かったが、学生側の意見と教師側の意見、カリキュラム上の要請等が必ずしも一致するわけではないので、将来的にこのような活動をクラスに組み入れる場合は調整が必要となる。3つ目は、クラスでの題材の提示の仕方である。今回は学生に事前に調べてきてもらったり、多数の例を示すようにしたりしたが、Witte (2011:97) が述べるように、クラスの教材は目標文化の豊富で多様でダイナミックな性質を完全に反映することができないため、どうしても限定的なものにならざるを得ない。学習者が目標文化の多様性やダイナミックさに自分で気づき、進んで調べる姿勢がないと、逆にステレオタイプを押し付けてしまうおそれがある。4つ目はフィードバックの問題である。今回は、翻訳自己分析シートの記述と実際の翻訳に齟齬があると思ったものを教師が取り上げ、クラス全体で話し合うという形をとったが、この「齟齬がある」という感覚も教師の主観によるため、教師の主観を押し付けてしまう可能性がある。5つ目は、評価に関する問題である。今回の分析を通して、翻訳が異文化間能力の育成に役立つ可能性があることはある程度示せたかと思うが、実際に異文化間能力が育まれたのかどうかをどう評価するのか(評価すべきなのか)、評価する場合は誰がどのように基準を決めるのか等、複雑な問題が残っており、これは今後の課題としたい。

参考文献

- Byram, M. (1997). *Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Cook, G. (2010). *Translation in Language Teaching: An Argument for Reassessment*. Oxford: OUP.
- Firth, A., & Wagner, J. (2007). On Discourse,

- Communication, and (Some) Fundamental Concepts in SLA Research. *The Modern Language Journal*, 91, 757-772.
- Halliday, M., & Matthiessen, C. (2004). *An Introduction to Functional Grammar* (3rd ed.). London: Arnold.
- Kern, R. (2002). Reconciling the Language-Literature Split Through Literacy. *ADFL Bulletin*, 33(3), 20-24.
- Kramsch, C. J. (1993). *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford: OUP.
- Kubota, R. (2003). Critical Teaching of Japanese Culture. *Japanese Language and Literature*, 37(1), 67-87.
- Reiss, K. (1981). Type, Kind and Individuality of Text: Decision Making in Translation. *Poetics Today*, 2(4), 121-131.
- Schulte, R. (1988). The Art and Craft of Translation: Re-creative Dynamics in Cross-cultural Communication. In B. Lothar & D. Haack (Eds.), *Perceptions and Misperceptions: the United States and Germany: Studies in Intercultural Understanding* (pp. 169-176). Tübingen: G. Narr.
- Witte, A. (2011). On the Teachability and Learnability of Intercultural Competence: Developing Facets of the "Inter". *Intercultural Competence: Concepts, Challenges, Evaluations*. (pp. 89-107). Berlin: Peter Lang AG.

Webpage

大島優子オフィシャルブログ『ゆるりゆうこ』

<http://ameblo.jp/oshima-y/entry-11329967451.html>

ベッキー・クルーエル "The Blog"

<http://blog.beckii.co.uk/post/30602983392/started-daily-vlogging>